

# Oliver Twist の文体

## ——反語表現について——

富 田 和 夫

### I 序

1812年といえば、ロシアが大陸封鎖令を破ったのを契機に、ナポレオンが50万の大軍を Moscow に遠征させて勝利を獲得した年である。この年 Dickens が生まれたことは偶然であるかもしれないが、1837年 Victoria 女王が即位した年に、彼が The Pickwick Papers を出し、続いて1838年に The Adventures of Oliver Twist を出したことは必ずしも偶然とはいえないであろう。1802年の Amiens の講和条約、1815年の Waterloo の戦における Napoleon 軍撃破により、イギリスは七つの海を支配し、Victoria 女王を載いて世界に君臨した。しかも18世紀に始まった産業革命は、ブルジョワジーの勃興とともに、労働者と資本家の激しい貧富の較差は著しくなり、また機械の利用とともに、手工業を駆逐する結果となり、ついに1811年には、イギリス北・中部地方において機械破壊の暴動が起こるに至った。この間、特に紡績工業は紡績機械の発明とともに、急速に発達してきたが、低賃金労働による女子の傭用、あるいはそれより安価な養育院から供給される子供達への重労働は、1812年機械破壊の暴動が鎮圧されて以来、1833年に幾分改良が加えられ、ようやく1834年、「救貧法改正条令」(Poor Law Amendment Law)<sup>1)</sup> が施行されるに至った。この改正条令によれば、各教区は work house (救貧院) を設置し、貧民を救済し、その費用は教区民の課税によってまかなうこと、そして貧民の給与は最低賃金労働者のそ

れよりも低いものであるなど、まだまだ完全とはいわれず、その生活は陰惨な社会の暗黒面を露呈したのである。Dickensはこの救貧院制度の矛盾と冷酷さをOliver Twistにおいて、鋭く示摘し、風刺している。しかし、彼の批判と風刺はこの制度の根本的無力さを辛辣に改革しようとするものではなく、この制度の運営方法やそれを相当する教区委員・役人、救貧院担当者の慈悲・親切・善意等への反語（Irony）で、一種の melancholy と sentimentality が漂っているといえよう。

DickensはOliver Twistにおいて人間を取りかこむ社会と救貧院制度のような問題を実によく観察し、その社会の邪悪、貧窮、苦悩、罪悪、矛盾など現実の人間生活に不幸をもたらす負（マイナス）の価値と国民の心に求める理想的な慈悲、親切、寛大さ、おもいやり、善意など正（プラス）の価値との対立によりユーモア、笑い、風刺、皮肉などの反語（Irony）を生み出す<sup>2)</sup> ことによって、一般大衆を啓蒙しようとしたのである。その結果、ユーモアと皮肉、善と悪、明るさと暗さとの対立によって生まれる反語の世界が中心となるため、登場人物はMr. Brownlow, Mrs. Bedwin, Miss Rose, Mrs. Maylieのように善人は善人、Mr. Bumble, Fagin, Sikesのように悪人は悪人といった人物の典型化から一歩も出ず、作品の価値を低める要因ともなりかねない。しかしDickensのrealisticな迫力のある描写力、次々とOliverによって事件を展開していく悪漢小説（picaresque novel）の手法<sup>3)</sup> やあるいは広義の‘Comedy of Humours’<sup>4)</sup> が、この作品のplotの欠如や不自然さ、後半のmelodramaticで道徳的な面を補強しているといえよう。しかしこうした欠陥、批難は近代リアリズムの確立されていないロマン主義文学の残影の存在している時代に活躍した作家のおちいりやすい所であり、わずか25才で人気を博したこの名声を失わないためには読者層の御機嫌を多少とるためだったともいえるであろう。しかし、なんといってもDickensの救貧院におけるBumble氏による「権力

の擬人化」、二人のアイランド人救貧院担当者の「従属の擬人化」による社会風刺という点に力点をおいて Oliver Twist の文体特色の一つである反語表現を観察し分析してみることによって Dickens がこの表現形態で何を意図したかを知ることが決して無意味ではないであろう。

## II 反語表現の具体的観察

ここで一つの具体的例を挙げて反語表現の環境の分析を試みてみよう。(The Adventure of) Oliver Twist, ch. XI. から Oliver がハンカチ泥棒のかどで一人の老紳士に訴えられ、即決裁判所 (dispensary of summary justice) に連れて行かれる。ここでの判事 Fang 氏 (話者) と、老紳士 (聴者) との間に交わされる言葉の環境をとらえてみる。

“The prosecutor was reading, was he?” inquired Fang, after another pause. “Yes,” replied the man. “The very book he has in his hand.” “Oh, that book, eh?” said Fang. “Is it paid for?” “No, it is not,” replied the man, with a smile. “Dear me, I forgot all about it!” explained the absent old gentleman, innocently. “A nice person to prefer a charge against a poor boy!” said Fang, with a comical effort to look humane. “I consider, sir, that you have obtained possession of that book, under very suspicious and disreputable circumstances; and you may think yourself very fortunate that the owner of the property declines to prosecute. Let this be a lesson to you, my man, or the law will overtake you yet. The boy is discharged. Clear the office.” “D——n me!” cried the old gentleman, burst-

ing out with the rage he had kept down so long, “d—  
—n me!” I’ll——”

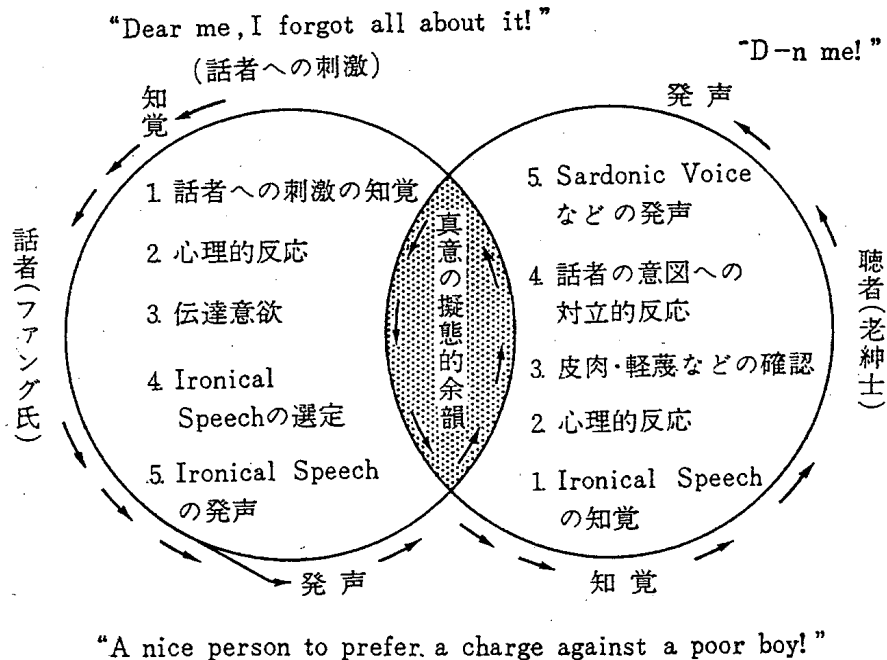
ここで判事 Fang 氏が用いた反語表現 “A nice person to prefer a charge against a poor boy!” の環境、文法構造、意味構造について分析してみよう。

### (1) 環境の分析

(a) 話者 (Fang 氏) : (1) 本の代金も支払わずに本屋さんから出てきたことを聞く (話者への刺激の知覚) → (2) 本の代金の支払いも忘れて出てきてかわいそうな少年を告訴する——自分が訴えられるようなことをして、かわいそうな他人を訴える——とはあきれたものだ (話者の矛盾・対立’への心理的反応) → (3) あきれかえった滑稽さのあまり反語的戒しめを相手に伝達したくなる (話者の伝達意欲) → (4) “A nice person to prefer a charge against a poor boy.” (Ironical Speech の選定) → (5) (Ironical Speech の発声)

(b) 聴者 (老紳士) : (1) “A nice person to prefer a charge against a poor boy.” (Ironical Speechの知覚) → (2) 「立派な人」という Sentence の Semantic component と「かわいそうな少年を告訴する」という Sentence の Semantic component が対立・矛盾 (conflict) して真意の擬態的余韻が聴者の心中で反応する (聴者の心理的反応) → (3) 話者の Ironical Speech の中に内在する conflict によって生じる ‘皮肉、軽蔑、冷笑、滑稽さなど’ を確認 (皮肉、軽蔑などの確認) → (4) 聴者の起訴した意図が話者の反語表現などにより否定されたことへの不満、憤怒 (話者の意図への対立的反応) → (5) Ironical Speech などの話者の意図への聴者の対立的反応の結果発声される Sardonic Voice などの発声)、以上のことを図式化すると次のよう

になる。

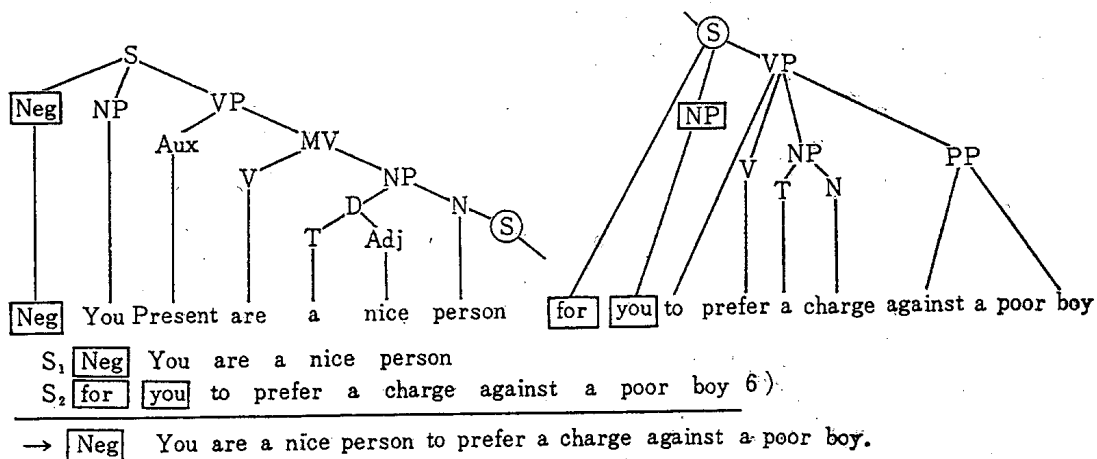


第1図

## (2) 文法構造としての反語の分析

“A nice person to prefer a charge against a poor boy!” という表現が「かわいそうな少年を起訴するとはご立派な人で(立派な人ではけっしてない)」という意味の文になることは、Would you like to stay for dinner? が「いや、もうそろそろおいとましくなくてはなりませんので」という相手の答えを半ば期待する修辞疑問文(反語)と同様で、この文だけではわからない。同じ言語の世界でも、一つの文を理解する話者と聴者の言語能力を現実の場面から切り離し、いわば抽象的な段階で規定するという問題と、もう一つは、このように抽象的に規定された言語能力が、どのように具象化されるかという現実の言語活動が問題になる。N. Chomsky は前者を「(話者と聴者の)言語を理解する能力」(competence)、後者を「(記憶・時間・場面などの制限を伴う)現

実に観察される言語活動」(performance)<sup>5)</sup> というように二つに分けている。したがって “A nice person to prefer a charge against

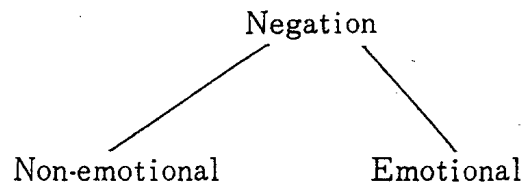


第2図

a poor boy!” という文が「どういう場面で、どういう時間に、どういう役割のどんな人が、どういう役割のどんな人に対して発言しているのか」ということが重要な意味をもってくる。こうした問題は competence の面と同時に performance の分野で研究していかなければならない。さて “A nice person to prefer a charge against a poor boy!” は、深層構造として次のように試みに分析してみた。

S<sub>2</sub> なる母体文 (matrix sentence) に S<sub>1</sub> なる文が挿入 (embedded) された (或は S<sub>1</sub> に S<sub>2</sub> が挿入れることもある) とみて、更に Sentence Negation が常に省略の形で内在しているものとする。Neg- を除去した S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> は意味論的に矛盾・対立 (conflict) して、Sentence Negation に類する「事実と反対の意味になるような否定詞」(又は準否定詞) が省略という形態をもってして存在しないと意味をなさない。または反語表現の形態においては fine, nice, clever, good などの lexical item を含む文に統語論上、あるいは意味論上、矛盾・対立した文が挿入される時に、「ご立派な、いやな、馬鹿な」などの反対の意味の lexical

item が syntactically に規定されてくると考えねばならない。しかし 'You are a nice fellow, (I dare say.)' において I dare say のような文が存在しない時は、時間、場面、話者の立場、といった環境が 'You are a nice fellow.' という文と矛盾・対立したものでなければならず、この点になると competence ではなく performance の面で分析しなくてはならなくなってくる。

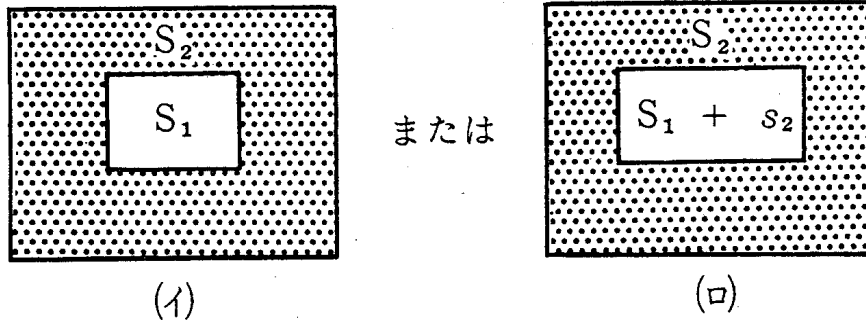


第3図

ここで Negation を感情的（強調的）なものとは非感情的（非強調的）に別けたのは、a lot, quite a few, nice, fine, などが not a lot, not quite a few, not nice, not fine とは異なった感情の附加されたあるいは強調された反語となるのであって、事実を否定詞をもって否定するのとは言葉のニュアンスの相異がでてくる。すなわち感情が加わってきて、反語に皮肉、軽蔑、ユーモア、などが生じてくる。したがって反語は Emotional Negation の省略ととるか、performance において矛盾した場面での nice の lexical item に「悪い意味」を認めるかのいずれかである。また目下、生成文法では Intonation, Stress に関しては General Phonology で扱うか、Syntax で扱うか Chomsky 学派は口をつぐんでいる状態であるが、この方面での分析・解明がなされれば You are a nice person～ において nice の部分が昇降調 (Rising Falling Intonation) になる場合は Syntax の場合、次に否定または矛盾の文がくるとか、意味論的にも矛盾・対立の内包 (connotation) の

文がくる場合といった具合に説明されてくるのではあるまいか。

Irony は実際に用いられる賞讃の言葉をもってして、反対の非賞讃を表現するのであるが、これは  $S_2$  (非賞讃を内包する文) なる文 ((伝統文法で context といっているものでもよい)) に  $S_1$  (賞讃を内包する文) が挿入されて  $S_1 + S_2$  の反語表現が成立するとみられる (逆に軽蔑の言葉で、事実ほめるような  $S_1$  の文に  $S_2$  が挿入されることもあるが)。しかし Oxymoron (矛盾語法) のように  $S_2 = s_1, s_2 \dots s_n$  の一つ  $s_2$  と対立していることもあり、あるいは  $s_2$  がないこともある。それは、 $\boxed{\text{Neg}} + S_1 + (s_2)$  である  $S_1 = \text{He is a nice man}$  だけでも反語形態をなすから、この場合  $S_1 = \text{He is a nice man}$  と  $s_2 = \text{He is a careless man}$  の対立で反語形態をなすので  $S_2$  と  $(S_1 + s_2)$  が対立しなくてもよい。そして、(イ)、(ロ)の両方の反語表現に生ずる「皮肉、軽蔑、ユーモアなど」を表わす Adverb of manner がよく付加されるが、対立の結果生ずる様



第4図

- (イ) He made many careless mistakes again. What a nice  
 $S_2$   $S_1$   
 fellow, he is!
- (ロ) He is a nice and careless man.  
 $S_1$  +  $s_2$

態を表現するものなので書かれたもののみの形態で話されたものには現



われない。

反語  $\left\{ \begin{array}{l} \text{(イ)の形態 } (S_1 + S_2) + (\text{MAd}) \\ \text{(ロ)の形態 } (S_1 + s_2) + (\text{MAd}) \end{array} \right.$

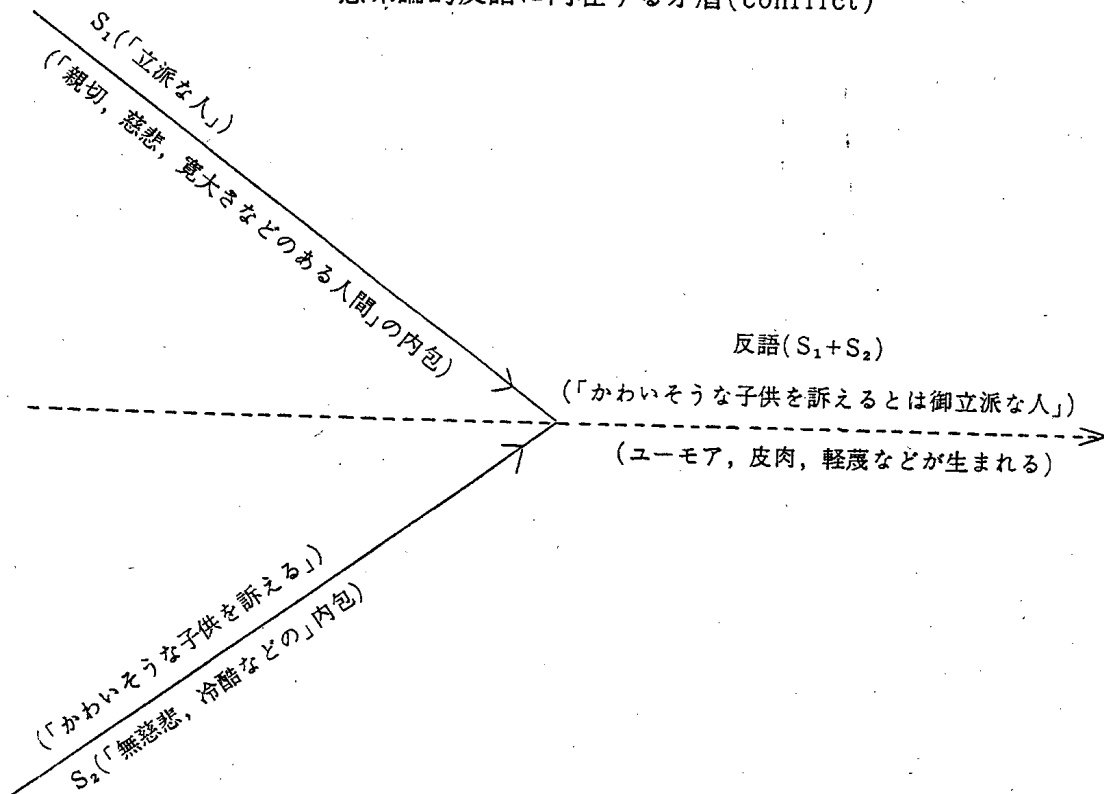
(但し(ロ)の  $s_2$  は  $S_2 = s_1 \dots s_n$  のいずれでもよい。)

MAd: with a threatening look, ironically, contemptuously, with an ironical smile, with a comical effort to look humane, in a jeering tone, with a contemptuous air, with supreme contempt,

(以上 Oliver Twist)

Ex: "Has this man been a drinking, sir?" inquired Blathers, turning to the doctor.

意味論的反語に内在する矛盾(conflict)



第5図

“What a *precious muddle-headed* chap you are!”  
said Duff, addressing Mr. Giles *with supreme con-*  
*tempt*...ch. XXXVI.

(これは(口)の形態である。)

### (3) 意味論的定義

A figure of speech in which the intended meaning is the opposite of that expressed by the words used; usually taking the form of sarcasm or ridicule in which laudatory expressions are used to imply condemnation or contempt. (OED)

反語 (Irony) はギリシャ語に由来し、「わざと無知を装ったり、そのふりをすること」の意味に用いられたのが始まりである。cf. Socratic Irony. そして OED その他の修辞学的文献から、次のような結論が得られる。Irony には (1) 実際に用いられることば——一般に賞めことば——の意味とは反対の (または異なった) 意味が言い表わされていること、(2) 皮肉 (sarcasm)、ひやかし (ridicule)、ユーモア (humour) をねらおうとする意図が含まれること、(3) この他は話者に真意をにおわせようとする擬態の存在すること。これを意味論的定義に換言すると、Irony とは話者が話題にしている事物に対する不賛同的気持を、聴者に対して (多くはまじめを) 装った態度で、皮肉・ひやかしたらしめようとする結果、その意味するところが実際に用いられている言葉の意義と反対になる表現といえる。またこれと表裏の関係にある Rhetorical Question (修辞的疑問)、Litotes (or Meiosis) (緩叙法)、Hyperbole (誇張法) や Intensifying Smile (強意的直喩) などがある<sup>7)</sup>。

### III Oliver Twist の文体としての‘反語表現’について

Oliver Twist の世界は大別して次のようになるであろう。

- §1 貧困者、孤児を収容する救貧院 (workhouse) の世界。
- §2 London における Fagin (スリの親分)、Bill Sikes (強盗) や Nancy (Sikes の情婦) などの「悪」の世界。
- §3 Miss Rose, Mrs. Maylie などのように「慈悲・同情・寛大さ」のある「善」の世界。

以下文体の特色である反語表現を中心に各世界を観察してみよう。

### §1 (その一) 救貧院の世界

(1) *tender mercies*, etc.. 元来、*tender mercies* (or a *tender mercy*) は罪人、弱き人に対する神の慈悲を表現する聖書から出た成句で、しばしば反語として用いられている。

*cf.* A righteous man regardeth the life of his beast: but the *tender mercies* of the wicked are cruel. — prov. xii : 10.

He fixed his eyes on Mrs. Carney as he said this; and if ever a beadle looked *tender*, Mr. Bumble was that beadle at that moment.—ch. XXIII.

…that beadle had looked with an eye of *tenderness* and *affection*, and…—ch. XXVII.

教区委員、救貧院担当者の罪人や弱き人に対する慈悲深さに *tender* という反語表現が用いられている。

Oliver cried lustily. If he could have known that he was an orphan, left to the *tender mercies* of churchwardens and overseers, perhaps he would have cried the louder.—ch. I.

ここでは教区委員、および救貧院担当者の無慈悲さへの反語として用いている。

...where, on a rough, hard bed, he sobbed himself to sleep. What a noble illustration of the *tender laws* of England! They let the paupers go to sleep.—ch. II.

救貧院制度に対するイギリスの無慈悲な法律のために救貧院の孤児たちは固いベッドで泣き泣き毎日を送り、そしてあらゆる貧民は救貧院で少しづつ餓死させられるか、すぐに餓死するかのいずれかを選ばされる。そして女性は家庭争議の訴える費用のかからぬようにご親切にも、人情ある離婚のお世話を、男性には家族をひきはなして独身者にしてしまうのである。そのことは次の *humane, wise, kindly* という表現によって風刺されている。

(□) *humane, etc.*

They made a great many *wise* and *humane* regulations, having reference to the ladies, which it is not necessary to repeat; *kindly* undertook to divorce poor married people, in consequence of the great expense of a suit in Doctor's Commons.—ch II.

You are a *humane* woman, Mrs. Mann.—ch II.

救貧院担当者 mann 夫人の無慈悲さに対して用いられている。

Upon this, the parish authorities *magnimously* and *humanely* resolved, that Oliver should be “farmed,” or in other word...—ch II.

教区委員会が Oliver を「教区の費用負担で預けられる」すなわち、

救貧院の院分にやられることを「寛大」で「慈悲深い」と皮肉っている  
のである。これも救貧院制度への批判である。

It's *humane* too, gen'leman acause, even if they've  
stuck in the chimbley, roasting their feet makes'em  
struggle to hextricate theirselves.—ch III.

救貧院孤児を煙突掃除に使用する際の非常に残忍、無慈悲さを *humane*  
と表現している。

(v) *consolatory*

Apparently this *consolatory* perspective of a mother's  
prospects failed in producing its due effect.—ch I.

母親になることの将来に関するこの「慰安的予想」と表現しているが  
Dickens 特有の反語表現で実に「不安を覚えさせる予想」をこのよう  
に言ったのである。

(=) *thanks to...*, etc.

It (=a good sturdy spirit) had had plenty of room to  
expand, *thanks to* the spare diet of the establishment;  
—ch. II.

...and *what more would* (=wish) *the people have!*—  
ch. II.

Of this *festive composition* each boy had one porringer,  
and no more—ch. II.

Sevenpence-halfpenny's worth per week is a *good round*  
*diet* for a child; a great deal may be got for sevenpence-

halfpenny, quite enough to overload its stomach, and make it uncomfortable.—ch. II.

…where twenty or thirty other juvenile offenders against the poor-law, rolled about the floor all day, *without the inconvenience of too much food or too much clothing,*

…—ch. II.

以上全ては救貧院の食事制度に関する痛烈な風刺であり、これは同時に救貧院制度とそれを運営している人達への反語である。食事を食べすぎる不便もなく、胃袋につめこみすぎるほどでもない費用を更に節減されて、死んだ場合に、医者が解剖しても何も発見されないくらいの食事が与えられたとは、少し誇張しすぎるが、非常に栄養失調な食事制度であったことを表現している。したがって Oriver が救貧院孤児を代表して「お粥さもう一杯下さい」(“Please, sir, I want some more.” — ch. II.) と食事係りに要求する言葉はイギリス人の間ではあまりにも有名で日常の会話の中でも用いられている。

(ホ) capital, blessings, etc.

Which was a *capital* way of raising his spirits, and putting him quite at his ease.—ch. III.

救貧院で Oliver が「馬鹿だ」とののしられることが、彼の心をふるいたたせ、とても気楽な気持ちにさせたのはこの上もない良い方法であったというのは全く反語で、これも救貧院担当者、教区委員の運営のあり方について批難している。

For the combination of both these *blessings* is in the one simple process of picking oakum, Oliver bowed low by the direction of the beadle, and then hurried away

to a large ward.—ch. II.

(v) benevolent, etc.

Oliver, having had by this time as much of the outer coat of dirt which encrusted his face and hands, removed, as could be scrubbed off in one washing, was led into the room by his *benevolent* protectress.—ch. II.

救貧院担当者マン夫人に対して、さきの humane と同様に反語として用いられている。

...he would have established that *sage* individual's prophetic character, ever, by trying one end of his pocket-handkerchief to a hook in the wall, and attaching himself to the other.—ch. III.

白チョッキの御賢明な紳士である教区委員への皮肉的、誇張した表現。

It chanced one morning, while Oliver's affairs were in this morning *auspicious* and *comfortable* state, that Mr. Gamfield, chimney-sweep, went his way down the High Street, ...—ch. III.

Then, catching hold of the bridle, he gave his jaw a sharp wrench, by way of *gentle* reminder that he was not his own master.—ch. III.

以上3例は Oliver が粥のお代わりを請求したために、非常にきびしい罰を受けたうえ、賞金付きで、賞金目あての煙突掃除人 Gamfield 氏に払下いげになりそうになる際の Gamfield 氏への人物批判である。Gamfield 氏の救貧院孤児や馬の扱い方は、そのまま Dickens が第2章で述べているようにある実験派哲学者の学説・実験に相当する当時の

貧院担当者の救扱い方にあてはまるものである。

*cf.* Everybody knows the story of another experimental philosopher who had a great theory about a horse being able to live without eating, and who demonstrated it so well, that he got his own horse down to a straw a day, and would unquestionably have rendered him a very spirited and rampacious animal on nothing at all, if he had not died, four-and-twenty hours before he was to have had his first comfortable bait of air.—ch. II.

#### §1 (その二) 救貧院に関する葬儀屋 (undertaker) の世界

実験哲学者である救貧院担当者によって多数の救貧院収容者の死者を処理する葬儀屋も、救貧院担当者のかたわれで、救貧院孤児を「好きかってに」実験的に年期奉公として、食事をろくに与えず働かせたのである。

*cf.*...it was arranged that Oliver should go to him that evening “upon liking”——a phrase which means, in the case of a parish apprentice, that if the master find, upon a short trial, that he can get enough work out of a boy without putting too much food into him, he shall have him for a term of years, to do what he likes with.—ch. IV.

Oliver はこうした葬儀屋の Sowerberry 氏のところへ年期奉公にやられる。この葬儀屋もいかに無慈悲で、食べ物は犬もみむきもしない、粗末な肉のごちそうがせいぜいであった。以下葬儀屋の世界に関する反語表現をみていこう。



(i) gracious, etc.

As they drew near to their destination, however, Mr. Bumble thought it expedient to look down, and see that the boy was in good order for inspection by his new master: which he accordingly did, with a fit and becoming air of *gracious* patronage.—ch. IV.

ここは教区委員の Bumble 氏が Oliver を葬儀屋 Sowerberry 氏の所につれていくところで、Bumble 氏の態度を皮肉たっぷりに表現している場面である。gracious は自分より目下の者や、身分の低い者に対して「寛大な」ことを意味するもので、Bumble 氏はそれどころか全く反対である。

“Here, Charlotte,” said Mrs. Sowerberry, who had followed Oliver down, “give this boy some of the cold bits that were put by for Trip. He hasn’t come home since the morning, so he may go without ’em. *I dare say* the boy isn’t too *dainty* to eat ’em—are you, boy? —ch. IV.

飼犬の Trip にとっておいた粗肉を葬儀屋の Sowerberry 夫人は Oliver に与えて、「食べ物について高尚なので口に合わないほどお上品で気むずかしい (*dainty*)」子供ではないだろうと皮肉を言っている。*I dare say* が *dainty* と対立 (*conflict*) して反語表現となっていることをはっきりと示している。

*I dare say* or *daresay* (=very likely) は「(確信から) あえて断言する」の義から、「(そうらしいので) いってみる」の意味になり、三転して「思うに、たぶん」の意味となった。これが反語的に用いられると原義に近づく。この *I dare say* は Dickens の文体として反語によ

く用いられる。

*cf.* There are many things from which I might have derined good, by which I have not profited, *I dare say*.  
—Dickens, A Christmas Carol.

(四) obliging, etc,

“Then, I’ll whop you when I get in,” said the voice; “you just see if I don’t that’s all, my work’ us brat!” and having made this *obliging* promise, the voice began to whistle.—ch. V.

It is difficult for a largeheaded, small-eyed youth, of lumbering make and heavy countenance, to look dignified under any circumstances; but it is more so, when super-added to these *personal attractions* are a red nose and yellow smalls.—ch. V.

…and how impartially the same *amiable* qualities are developed in the finest lord and the dirtiest charity-boy.—ch. V.

Oliver が葬儀屋の Sowerberry 氏の家で働いている Noa Claypole, 別名 charity-boy という容姿の魅力もあまりよくない少年にいじられるところで、Dickens はこの場面から、「身分の卑しい汚い人間でも、どんなに立派な貴族でも嘲笑的に言って、人間は自分より低い（弱い）人間が現われると、その人間を軽蔑・冷笑して、優越感を感じるとはなんとお美しい人間の性質であろうか！」と言わんとしているのである。そして Oliver の眼に映る人間のみにくさは、更に葬儀に参列してみると、表面的に人の死を悼んで悲歎にくれているが、自分たちだけになると全くなにごともなかったかのように陽気になったり、夫婦間でさえ、

配偶者の埋葬式が終ると、けろりと平静になる人がいることだった。次の文はそうした人達に対する反語表現である。

…he had many opportunities of observing the *beautiful* resignation and fortitude with which some strong-minded people bear their trials and losses.—ch. VI.

That Oliver Twist was moved to resignation by the example of these *good* people, I cannot, although I am his biographer, undertake to affirm with any degree of confidence.—ch. VI.

(\*) for the benefit of, etc.

And between every syllable, Charlotte gave Oliver a blow with all her might: accompanying it with a scream, *for the benefit of society*.—ch. VI.

for the benefit of について ironical use (=for the edification of, as a hit at, to the inconvenience of, etc) に言及しているのは POD だけではないかと思う。XVI 章にも for the benefit of が反語として用いられている。

“Better not!” exclaimed Noah. “Well! Better not! Work’us, don’t be impudent. Your mother, too! She was a *nice’um*, she was. Oh, Lor!”—ch. VI.

Oliver は Noah Claypole による自分の母親や救貧院出身の自分に対する皮肉、Sowerberry 夫人からの社会へのこらしめとなるようにとたたかれ、しかられた結果、けんかをしてこの葬儀屋をとりだしロンドンに向う。

次の文は Sowerberry 夫人が完全に Oliver とうまくいけなくなり、

援助のしようもなく、Oliver を嚴重に罰しないと、人間の皮を着た畜生かなにかのように「極めて不快な」性格を与えられることは明白なことを反語表現で表現している。

...it must be quite clear to every experienced reader that he would have been, according to all precedents in disputes of matrimony established, a brute, an unnatural husband, an insulting creature, a base imitation of a man, and various other *agreeable* characters too numerous for recital within the limits of this chapter.—ch. VII.

## §2 London の「悪」の世界

London に Oliver は出て行き、ユダヤ人 Fagin (スリの親分) や、Sikes (強盗) の仲間に入る。次の反語表現は Oliver がスリ仲間を誘われて Fagin 一味の巣窟へ連れて行かれ、彼等に「ありがたくも、御親切に」ポケットの中へ手を入れられ、物をまきあげられるところで、ユーモアと滑稽さがあふれている。

### (i) Obliging, etc.

One young gentleman was very anxious to hang up his cap for him; and another was so *obliging* as to put his hands in his pockets, in order that, as he was very tired, he might not have the trouble of emptying them, himself, when he went to bed.—ch. VIII.

Obliging の反語表現も Dickens の好んだ表現らしく、V 章にも obliging promise として用いられている。これは「物事をすすんでやってくれる、喜んで親切なことをしてくれる」という意味である。

Although Oliver had been brought up by philosophers,

he was not theoretically acquainted with the *beautiful* axiom that self-preservation is the first law of nature.

—ch. X.

Oliver は救貧院の委員のような 実験派哲学者達に養育されてきたとはいえ、ハンカチ泥棒の仲間同志でも、まず自分から逃げてしまうような自己保存がなんとお美しい自然の第一法則であるとは知らなかったと、悪の世界を風刺している。

“Oh, no, I won't hurt him,” replied the officer, tearing his jacket half off his back, *in proof thereof*.—ch. X.

Oliver がハンカチ泥棒のかどで警官に捕えられたところで、その警官の手荒な扱いを「手荒なことはしませんよと言って、その憐みぶかい証拠に Oliver の（短い）上着の背中を半分引き裂いた」と言って皮肉的滑稽さを表現している。そして、ついに即決裁判所へ連れて行かれ、無慈悲な判事 Fang 氏の前に出され尋問される。

“Stand away, officer,” cried Fang; “let him, if he likes.” Oliver availed himself of the *kind* permission, and fell to the floor in a fainting fit.—ch. XI.

“Dear me, I forgot all about it!” exclaimed the absent old gentleman, innocently. “A *nice* person to prefer a charge against a poor boy!” said Fang, with a comical effort to look humane.—ch. XI.

かくて、裁判の結果は、Oliver の無実が確定して紳士 Brownlow 氏にひきとられる。しかしそれもつかの間、やがてまた、悪の世界へ連れもどされるのであるが、次の反語表現は Brownlow 氏宅での友人 Grimwig 氏の言葉である。

“Send Oliver with them (=those books),” said Grim-

wig with an ironical smile; hew ill be sure to deliver them sefely, *you know*.”—ch. XIV.

‘*you know*’ は ‘*as you know*’ (ごぞんじのように、ごぞんじのはずですが) の意味から反語として (ごぞんじないんですか、きっとごぞんじないんですね) と付加疑問と同様の働きをする一種の文修飾語句である。この Grimwig 氏の役割は、表面的にこぎれいな、一見思いやりのある 救貧院制度への批判の一つともとれるのである。次の文も Grimwig 氏の反語で、*Oh!*, *Oh, so!*, や *So*, などに導かれる (共感疑問) Sympathetic-question<sup>8)</sup> は反語表現を形成する。

“*Oh!* you really expect him to come back, *do you?*” inquired Mr. Grimwig.—ch. XIV.

(ロ) fine, respectable, etc.

“What a *fine* thing capital punishment is! Dead men never repent; dead men never bring awkward stories to light; *Oh*, it’s *fine* thing for the trade!”—ch. IX.

スリの親分 Fagin は絞首刑を恐れているにもかかわらず、死刑になった仲間を嘲笑して、自己保存の原理を発揮している。

…and, giving vent to another admonitory growl *for the benefit of* Oliver, led the way onward.—ch. XVI.

Brownlow 氏のつかいでロンドンに出て Nancy につかまってしまう。Nancy の言うことをよく聞く犬におしかりの唸り声を聞かされるところである。そして *for the benefit of*~ は Oliver への罰、教訓のために反語として用いられていて Dickens の好んで用いた成句である。

…for the sake of his young carcass: as would other-

ways have suffered for it—ch. XX.

There was a long pause. Every member of the *respectable* coterie appeared plunged in his own reflections—ch. XIII.

(v) gentle, genteel, etc.

強盗 Sikes の用いる反語、Dickens の Sikes への反語に *gentle*, *genteel* が用いられている。

With this *gentle* remonstrance, Mr. Sikes plucked the note from between the Jew's finger and thumb;—ch. XVI.

“You're a *nice* one,” added Sikes, as he surveyed her with a contemptuous air, “to take up the *humane* and *gen—teel* side! A *pretty* subject for the child, as you call him, to make a friend of!”—ch. XVI.

I'll do your business myself with a crack on the head. That makes no noise, and is quite as certain and *more genteel*.—ch. XXII.

(=) serve one right, etc.

“Keep back the dog; he'll tear the boy to pieces.”  
“*Serve him right!*” cried Sikes, struggling to disengage himself from the girl's grasp.—ch. XVI.

...yer'd have been locked up hard and fast a week ago, my lady. And *serve yer right* for being a fool.” “I know I ain't as cunning as you are,” replied Charlotte  
...—ch. XLII.

前文は Sikes の言葉、後文は Claypole が Charlotte とロンドンにかけおちする時の言葉である。この *serve one right* は原義の「人を正しく取扱う」の意から反語として「罰などに正しく報われる、当然の報いを受ける」の意となっている。

“And Fagin would not *rather* not!” rejoined Charley.  
—ch. VIII.

As he glanced timidly up, and not the Jew’s searching look, he felt that his pale face and trembling limbs were neither unnoticed *nor unrelished* by that wary old gentleman.—ch. XVIII.

…he thought *by no means unlikly*, when he recollected the general nature of the altercations between that gentleman and Mr. Sikes:—ch. XVIII.

*rather* は「断じて」という意の *Meiosis* による反語表現で、*nor unrelished* 「いいきみだと思う」の二重否定も単なる肯定とは異なった、一種の *Meiosis* である。*by no means unlikely* 「けっしてありそうでないことはない」の意から「大いにありそうな」という強調した表現になり皮肉や軽蔑が生じる。

(※) *precious, etc.*

Here, catch hold: there’s plenty more where they were took from. You won’t, won’t you? *Oh, you precious flat!*—ch. VIII.

付加疑問の一種で、この場合述語動詞が省略されており、Jespersen の非難のネクサス (*Nexus of Deprecation*) と呼ばれるものでこの形式もよく反語として用いられる。



“What a *precious* muddle-headed chap you are!” said Duff, addressing Mr. Giles, with supreme contempt.—ch. XXXI.

“A *pretty* thing it would be, wouldn't it to go and stop at the very first public-house outside the town,…” said Mr. Claypole in a jeering tone.—ch. XLII,

“Come in, d' ye hear?” growled this *engaging* ruffian.—ch. XIII.

Sikes の無愛想ぶりを滑稽をこめて「この愛想のよい悪党」といっている。以上が London の悪の世界に関する Fagin, Sikes, Nancy, など人物の性格に対する風刺として、*kind, genteel, obliging, pretty, for the benefit of, fine, seve one right, precious* などの反語表現が用いられている。こうした身分の賤しい悪の世界においてさえ、彼等は自己保存の原理にしたがって行動しているのである。そしてこの悪の世界は *capital punishment* (死刑) と *fear* (恐怖)、*rage* (憤怒) などに真黒い (*dark*) 鉛色のように青黒い (*livid*) *image* がおおっている。悪の世界の死、怒り、陰気さ、悲しみ、恐怖、不安、などが「黒い霧」、「黒い水松」、「黒い急須」、「墓穴のように暗い」などこの物語のあとに、Dickens によって書かれた 'A Tale of Two Cities' の色彩のイメージと共通の面が、この物語においてすでに象徴されていたことはみのがせない。この点については述べるに長くなるので稿を改めねばならない。

cf. The *black teapot*, being very small and easily filled, ran over which Mrs. Corney was moralising; and the water slightly scalded Mrs. Corney's hand.—ch. XXIII.

ささやかな悪いことにも、救貧法改正のようなことにも、あまりいい

かげんにしておくとは大変なことになりかねないのである。

“It’s as dark as the grave,” said the Man, but all was still as death.—ch. XXVI.

### §3 「善」の世界

Oliver をとりかこむ Mr. Brownlow, Miss Rose, Mrs. Maylie に対する反語表現はみられず、直接、慈悲、親切心、善意、寛大さ、などとして表現されており、Dickens がこれらの概念を上流社会の人の心に求め、これらによって社会悪は充分救済しうると考えたのである。

§1, §2 で反語表現として用いられたものを中心にみてみよう。( ) 内の数字はその用例数を示す。

- (イ) compassion: ch. XL. (1)      pity: ch. XL (1)
- (ロ) goodness (or good): ch. XL (1), XLI (3), XLVII (1), LI (2), LIII (1)

Ex: Let me see them again, and beg them, on my knees, to show the same *mercy* and *goodness* to you.—ch. XLVII.

- (ハ) hope: ch. XL (1), XLI (2), XLIX (1)
- (ニ) benevolence (or benevolent): ch. XLI (3), LIII (1)
- (ホ) affection: ch. XLI (1)/humanity: ch. XLI (1)
- (ヘ) kindness (or kind, kindly): ch. XLI (2), XLVI (4), LI (1).

Ex: “You will be *kind* and *good* to him, for you are, everyone,” said Oliver.—ch. LI.

- (ト) considerate: ch. XLVI (1)
- (チ) mercy: ch. XLVII (2) XLIX (1), LIII (1).
- (リ) wish: ch. XLIX (1)
- (ヌ) bless: ch. XLI (1)

Ex. He said, "God bless you to me,..."—ch. LI.

(ル) tender: ch. LI.

Ex: *Joy* and *grief* were mingled in the cup; but there were no bitter tears; for even grief itself arose so softened and clothed in such *sweet* and *tender* recollections, that it became solemn pleasure, and lost all character of pain.—ch. LI.

「喜び」と「悲しみ」が混合してできあがるものは反語表現であり、Dickens の反語には苦い涙さえも融けてそのあと甘い、やさしいものが思い出として残るような描き方、ユーモアと笑いがともない、Oliver の最後は幸福になるというメロドラマ的などころがある。

(オ) charitable (or charity): ch. LII (2)

#### IV. 結論

慈善、寛大さ、親切心、などの善の世界と無慈悲、冷酷、陰気、恐怖などの悪の世界が対立して成立している反語の世界、すなわち救貧院の世界に重点がおかれていたのではあるまいか。それは §1 から §3 まで *tender*, *mercy*, *good*, *kind*, といった言葉が連なっており、悪の世界、善の世界、救貧院の世界に欠如しているものが、ハンカチ泥棒の事件の個所で述べられているのでみてみよう。この事件で逃亡してしまった2人の子供のハンカチ泥棒の件につき Dickens は、この物語の言わんとしている重要な要点を反語表現をまじえて述べている。これこそ、筆者の結論の主体をなすものであり、Dickens の文体の特色の一つとして反語表現が用いられた理由なのでもあるから。

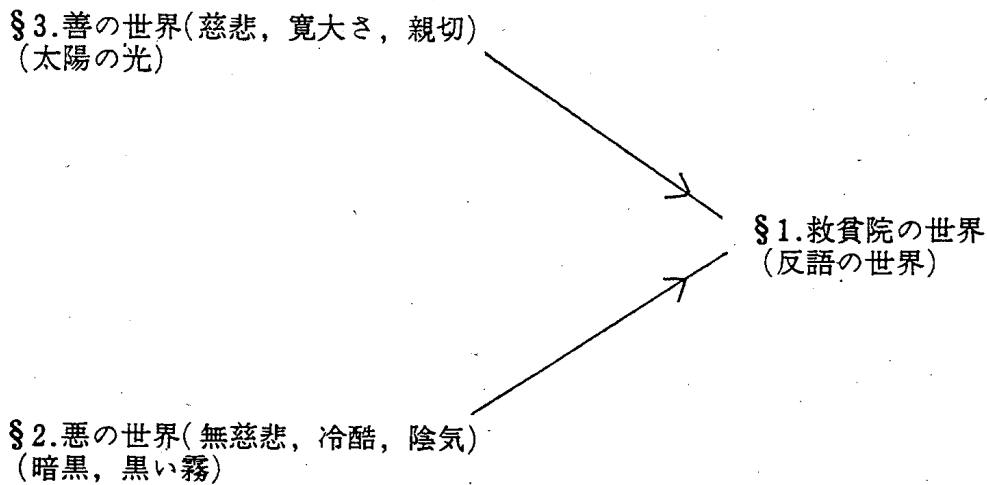
...the said philosophers *very wisely* reducing the good lady's proceedings to matters of maxim and theory: and

by a very neat and pretty compliment to her exalted wisdom and understanding, putting entirely out of sight any considerations of heart, to generous impulse and feeling. For, these are matters totally beneath a female who is acknowledged by universal admission to be far above the numerous little failings and weakness of her sex.—ch. XII.

Dickens の言わんとしていることを要約すると、

『国民としての自由と個人の自由は忠実なイギリス国民の第一義的最大の誇るべきことだから、この逃げた2人のハンカチ泥棒の行動は、公共心や愛国人に富む人々からは称讃されるのは当然で、この自己保存こそ健全な判断力ある哲学者たち（筆者注：救貧院改正法立法者および救貧院担当者、教区委員をさす）が「自然」の根本原理だときめたのである。そしてこれらの人たちは、賢明にも「自然」の行為を単なる原理や理論（筆者注：救貧院改正法およびその細則をさすともいえよう）に要約してしまい、「自然」の高い叡智や理解力をこじんまりと、こぎれいにほめそやすことによって、おもいやり、慈悲、親切心、寛大さなど、全く無視してしまっている』のようになる。この慈悲、親切心、寛大さ、おもいやりは善の世界、悪の世界、いずれにもおよぶ神の掟なのであってこれを神に感謝せずしては真の幸福はあり得ない（第53章）というのが Dickens の真意である。悪女 Nancy が Sikes に殺害された時も善の光、太陽の光には Sikes は防ぎとめることはできなかった（第48章）。そして殺人者 Sikes も神の掟の裁きを受けねばならなかった。

Let no man talk of murderers escaping justice, and hint that Providence must sleep. There were twenty score of violent deaths in one minute of that agony of fear.—ch. XLVIII.



第6図

以上から Oliver Twist の文体の特色として「反語表現」は、Dickens の救貧院制度の外面的弱さ、教区委員、救貧院担当者への反語であるといえよう。

## 〔註〕

- 1) イギリスの Poor Law は Elizabeth 朝時代, 1601年以來あった法制であるが, 完全に法律化し, 実行されたのは, 1834年 Poor Law Amendment Act が施かれてからであり, 1948年 National Assistance Act (国民救助法) の制定とともに廃止された。
- 2) Henri Bergson; Le Rire (1900) 「笑い」(鈴木力衛訳) 白水社。p. 99; 「おそらく理想 (ideal) に対する現実的な (real) ものの対立, あるもののあるべきものに対する対立であろう。ときには, それがまさにあるものだと信じているふりをして, あるべきことを言う。そこに反語 (Irony) が成立する。ときには逆に, あるものを綿密, 精細に描写して, それこそ事物があるべきものだと信ずるふりをする。ユーモアは往々にして, このようにして発生する。こんなふうに定義されたユーモアは反語の逆である。ユーモアも反語, もともに諷刺の一つの形である」(鈴木力衛訳)

André Maurois: Études anglaises (1927), "Dickens," pp. 155-7;  
Presidential Address (1958) "Wit and Humour" 「ディケンズ」青木雄造 (研究社) p. 32

「ディケンズの世界は観察と想像力という一見対立する二つの本質的な要素がからみあって、そこから現実と非現実の入りまじった彼独自の世界がつくり出される。彼はリアリスティックな態度を保ちながら、読者の注目を向けたいと願っている一点だけを想像力によって拡大し、縮少し、ディフォルメする。そこに笑いが生まれる」(青木雄造訳)

- 3) この手法は Dickens が少年時代に父の書斎に入って *Peregrine Pickle*, *Roderick Random* や、*Humphrey Clinker*. (以上 Tobias Smollet の作品)、*Tom Jones* などを読んだ影響と言えるだろう。

cf. Dickens; *David Copperfield*, ch. IV.

J. Foster: *The Life of Charles Dickens*. ch. I. p.7

‘From that blessed little room, *Roderic Random*, *Peregrine Pickle*, *Humphrey Clinker*, *Tom Jones*, *The Vicar of Wakefield*, *Don Quixote*, *Gil Blas* and *Robinson Crusoe* came out, a glorious host, to keep me company.’

- 4) R. C. Churchill; ‘Charles Dickens’ in ‘From Dickens to Hardy’ (1958) p.125. ここにおいても、Dickens の少年時代に耽読した *Fenny Fielding* や *Gold Smith* の影響がうかがえる。

‘If we use the term ‘comedy’ in its very widest sense, covering such examples as *Volpone* and *Measure for Measure* as well as *Tom Jones* and *She Stopps to Conquer*, then we can truly say that almost all Dickens’s work is in this field. Comedy can be a very serious thing and have a very serious purpose behind it. The first chapters of *Oliver Twist*, the workhouse chapters, are among the best things that Dickens ever wrote.’

- 5) Noam Chomsky: *Aspects of The Theory of Syntax* (1966), §1. p.4
- 6) Edward S. Klima: *Negation in English* (1964), p.277. Ross, J. R.: *A Proposed Rule of Tree-Pruning*. (1965)
- 7) 拙稿「Irony (反語)」(「詳解英文法辞典」井上義昌編 1966)
- 8) Twadell, W. F.: *The English Verb Auxiliaries* (1963), p.18: Kruisinga, E. A.: *A Handbook of Present-Day English* (1932) §426.